



立川の歴史、 調査中。

市史編さん委員でもある鈴木功氏への聞き書き調査の様子（富士見町一丁目富士塚公園にて）

第8号では令和元年度発行の資料編を見据え、民俗・地誌部会が特集を組み、資料編の一部を紹介します。部会特集として、『資料編 柴崎の民俗』にも掲載予定の富士塚調査を例として、民俗・地誌部会が行っている活動を取り上げます。民俗調査の基本のひとつである「聞き書き」の調査をはじめとした、非文字資料を調査・分析する方法について解説します。「市史のつくりかた」では「市史編さん事業のあゆみと展望 一事業の中間地点をむかえて一」と題し、5年目を迎えた市史編さん事業の活動を振り返りながら、今後の取り組み内容や、長期的な課題についてまとめています。「新しい市史の編さんによせて」では、ついに再会を果たした竹内勇真氏との対面の様子を紹介します。

今年度末には、資料編『柴崎の民俗』のほか、『古代・中世』、『現代①』の3冊の資料編刊行を控えています。これからも市民の皆さんに分かりやすい市史をお届けできるよう、市史編さんを進めてまいります。

目次

・新しい市史の編さんによせて……………	2	・平成31年4月～令和元年9月活動報告……………	11
・部会短信……………	3	・資料・情報提供のお願い……………	11
・部会特集（民俗・地誌部会）		・立川写真館 現代部会編……………	12
のそてみよう 民俗・地誌部会の調査～富士塚公園と浅間神社…	4～7	・刊行物紹介……………	12
・市史のつくりかた 市史編さん事業のあゆみと展望		*連載*	
一事業の中間地点をむかえて……………	8～9	・立川おっこぼれ話「多摩の空襲と米軍の攻撃目標」……………	10



新しい市史の編さんによせて 再会、竹内少年。

平成31年3月に調査報告書「向郷遺跡 竹内勇貴氏寄贈資料 調査報告書」が発行されました。

竹内勇貴氏寄贈資料とは、当時小～中学生だった竹内少年が発掘した向郷遺跡の遺物のことを指します。丁寧に発掘・整理された大量の遺物は、昭和57年(1982)に立川市へ寄贈されました。しかしその後、ご家族の転居をきっかけに少年とは連絡がつかなくなってしまい、遺跡の調査に不明な点を残したまま、何年もの月日が経過してしまいました。

今回「広報たちかわ」で報告書の刊行を知ったご本人からの電話をきっかけにして、ついに竹内さんと対面することができました。

「新しい市史の編さんによせて」では、竹内さんからは当時の思い出と立川市史への思いを、そして先史部会編集委員の安孫子昭二さんからは「竹内少年」とついに会うことがなかった今の思いをお聞きました。

あの日の事は今日でも鮮明に脳裏に焼き付いています。ふる里への扉が偶然開いたのは1973年5月の土砂降りの建築現場——掘削溝と残土山に多量の土器片が雨に打たれており、この辺り帯は縄文集落の上だと確信しました。後日近隣の土地で地主様より発掘の快諾を頂き、早速器材を揃え「トレンチ」掘りを開始、遺構に当たるかと拡張をしての日々でした。

春は北風の土埃、夏は蚊に暑さ、爽やかな季節枯れ葉の舞う晩秋、霜柱降雪など靴底が冷たい冬——移り行く景観を感じながらの調査でした。満天の星空の下、望み出たであろう多摩川右岸左岸低丘陵に点在する夕餉時の赤々と立ち昇る炎に集う往時の人々の風情など勝手に想い巡らしながら「スコープ」は舞うのでした。住居跡完欠7軒、土坑9基、集石6基、ピット無数などの成果を収め、実測、写真、図面、洗い、注記、復元・石膏埋め作業など至福な時間でした。

あれから40余年の歳月が流れ、突然の「竹内資料」に関する立派な報告書が刊行されたことに驚愕し、遺物達が陽の目を見る機会と戸籍が与えられたことに深謝の意を申し上げます。土を目にする事がめっきり少なくなりました。昨今、急激な文明の変遷に先人達の足跡も消えて行く一方の様です。立川市史編さん事業が掲げておられる旗印は、大変喜ばしく今後の躍進に期待しております。なお、この場をお借りして本報告書刊行に携われ尽力された方々、各学界先生方、立川市教育委員会、立川市史編さん先史部会の方々に、厚く御礼申し上げます。

竹内 勇貴



竹内勇貴氏近影

▼中学2年生当時の竹内氏。多くの土器や石器を発掘したことで新聞に取り上げられました。(立川市歴史民俗資料館蔵)

43年目の邂逅

先史部会編集委員 安孫子 昭二

昭和51年3月13日付けの東京新聞に、中学2年生の竹内少年が発掘出した縄文土器を抱えて満面の笑みで写っている。掘り出した縄文土器・石器の類は半端な量ではなく、しかもどんな小片も疎かにすることなく丁寧に水洗いし、注記し、さらに接合から復元までこなしている。一介の中学生が独学で考古学の基本を身につけていたのである。

寄贈された膨大な遺物類は、立川市に限らず界隈の縄文時代を知る一等資料であったから、先史部会の総力をあげて報告書作成に取り組んだ。「広報たちかわ」に載った報告書刊行の記事をみて、竹内氏が名乗りでてくれた。中年のオジサンとなって現れた氏は報告書を手にするや、中学生さながらの笑みをみせてくれたのであった。





部会短信 (令和元(2019)年度前期)

先史部会

「広報たちかわ」3月25日号で「向郷遺跡 竹内勇貴氏寄贈資料 調査報告書」を紹介したところ、寄贈者の竹内氏ご本人から連絡があり、発掘場所や当時の思い出話を直接お聞きすることができました。現在、大和田遺跡第1次・第3次・第4次地点出土資料の整理を進めています。歴史民俗資料館に当時の調査風景などの記録写真が所蔵されていたので、それらの整理も始めました。また、今年度から、砂川地域で採集された石器の調査を始めます。古墳時代の調査では、9月に、古墳の可能性のある沢稲荷(柴崎町四丁目)の地中レーダー探査および全景写真の撮影をおこなう予定です。



大和田遺跡第1次地点出土土器の実測風景

古代・中世部会

今年度末に刊行予定の「資料編 古代・中世」に掲載する資料の選定や解説の執筆作業を進めています。市内外から収集した多くの資料を掲載する予定です。また、昨年度から進めていた歴史民俗資料館蔵「立川文書」の修復事業も、今春終了しました。今回の修復では、従来よく用いられる文書の裏側に和紙を糊で貼り付ける裏打ちが行わず、文書の欠損部に和紙繊維を埋め込んでいく方法(リーフキャスト)を採用しました。その結果、文書本来の形に近い修復が可能となり、裏面に書かれている文字も見られるようになりました。立川文書は傷んでいて利用するには危険な状態でしたが、修復後は、平らな状態で文書を保存・活用できるようになりました。



東京修復保存センター工房での調査風景

近世部会

近世部会では、引き続き「資料編 近世① 柴崎地区」(令和2年度刊行予定)に載せる資料となる古文書を現在の字に直してパソコンに打ち込む作業を中心に取り組んでいます。また、それらの古文書を所蔵者別に解説する作業にも取りかかっています。

他方、地図・絵図についての取りまともを進めています。先日も昭島市の廣福寺において近世初期の絵図を撮影させていただきました。この絵図は、土地の利益権を巡る争いに際して裁判機関の裁許を絵図と文字によって示した裁許絵図といわれるものです。こうした絵図の情報などございましたら何卒一報ください。



直享4年(1687)7月25日「小宮領六ヶ村・同田井島領拾四ヶ村・山口領拾ヶ村・球場論争之事」

近代部会

令和2年度末に刊行予定の「資料編 近代②」に向け、引き続き掲載資料の選定作業と、資料に記載された文章を解説し、原稿化する作業をすすめています。資料調査は東京都公文書館・市の永年保存書庫・歴史民俗資料館などで実施しました。さらに、市史編さん室内でも寄贈された資料の整理・撮影を行いました。

その資料の一つに立川高等女学校校友会発行「みさ」があります。同誌は昭和3年(1928)に創刊され、教員の論説や生徒の綴り方、学校行事の記録などを中心に構成されています。第5号には生徒の満州事変出征兵慰問文が、第14号には学校教育の特色が掲載されています。



立川高等女学校校友会雑誌「みさ」第14号の表紙 昭和15年

現代部会

今年度末に刊行予定の「資料編 現代①」の編集作業が山場を迎えています。これまでの調査で、市・都・国の所蔵している公文書のほか、GHQや米軍の記録、市民の方々から提供いただいた歴史民俗資料館や市史編さん室の寄贈資料など、多彩な資料が集まっています。それらを読み込み、掲載資料を選定しながら、解説の執筆に取り組みしています。限られた掲載資料のなかで、立川の現代史を立体的に描き出せるよう、今後も編集に鋭意努めていきます。

また、令和3年度に刊行予定の「資料編 現代②」に向け、市内各所や市外諸機関の所蔵する立川市関係の資料調査と収集も、スタートする予定です。



「砂中P.T.A.ニュース」No.6昭和33年(1958)(岡崎清平氏寄贈、歴史民俗資料館蔵)

民俗・地誌部会

民俗・地誌部会では三つの事業を同時並行で進めております。一つ目は、「資料編 柴崎の民俗」刊行(令和2年(2020)3月)に向けての編集作業です。調査にご協力いただいた方々を再度訪問するなど、記述内容の質の向上に努めております。二つ目は、「資料編 砂川の民俗」の令和3年度刊行に向けた、砂川地区(旧砂川町)での調査です。阿豆佐味天神社にて、聞き書き、神社所蔵写真等の調査、御鎮座から390年を迎えた祭礼の観察記録調査を実施しました。三つ目は、別冊「民俗・地誌編」へ向けての調査活動です。柴崎地区の調査も継続しております。調査にご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げますとともに、今後ともご協力を賜りますようお願い申し上げます。



阿豆佐味天神社での調査

のぞいてみよう 民俗・地誌部会の調査 ～富士塚公園と浅間神社

1. はじめに

民俗・地誌部会では、民俗を調査、記録し、その特徴と歴史を『新編立川市史』に編さんするために活動を進めています。民俗とは、生活の日常場面やハレの場面を、その移り変わりまでを含めたものをさしています。ここでは、令和2年(2020)4月に頒布が開始される『資料編 柴崎の民俗』に掲載予定の「富士塚」についての記述が、実際にどのような調査・解明の末に出来上がったのかを描くことによって、本部会の活動を解説したいと思います。

2. フィールドワーク

民俗という対象を、教科書的に言い直せば、文字化されずに口頭で伝えられる慣習的な生活文化と言えます。その解明は、フィールドワークとライブラリーワークという異なる方法の調査を通じて進められます。

民俗のフィールドワークとは、対象とする地域社会に暮らす方々から聞き書きを行ったり、お祭りなどの行事に足を運び、その様子を記録する参与観察を行ったりするアプローチ法です。

民俗・地誌部会では、地域の調査を開始するにあたって、巡見を行い、聞き書き、参与観察を経て、調査資料の位置づけ、執筆を進めています。

富士塚と称されている富士見町一丁目の富士塚公園(写真1)にある浅間神社を対象とする、民俗のフィールドワークを紹介します。なお、以下の紹介は、実際の調査経過に沿ったものではありませんが、わかりやすく、一部の内容や前後関係等をアレンジしていることをお断りしておきます。というのは、実際には、単独の調査者(部会員)とは限らず、複数の調査者の協働によって進めている面も少なくないからです。

【巡見】柴崎地区の最初期の調査は巡見という形で実施されました。住民の方(ここでは、市史編さん委員の鈴木功氏)の案内を得ながら、部会員が柴崎地区内をつぶさに実見しながら歩きました。その結果、富士見町一丁目の富士塚公園には、塚と称する小高い山があること、頂上部に神社があり、浅間神社と称していること、奉納額の記載から祠の上屋が昭和52年(1977)に改修されたものであること等を確認することができました。見て歩くことによって、住民の観点から地域社会の概観を捉えながら、民俗に関連する様々な情報やヒントを得ていくのです(写真2)。

【聞き書き】次に、特定地域やテーマに焦点を絞ってより多くの情報を得る目的で、聞き書きを実施しました。その一例として、富士見町一丁目の自治会の一つであ



写真1 富士塚公園



写真2 巡見にて鈴木功氏の解説を受ける

る五月会の会長宅で実施した聞き書きにおいては、五月会の祭礼は8月の諏訪神社祭礼と11月の浅間神社の2回行われていること、いずれも、富士塚公園を拠点とすること、富士塚公園は、第二次世界大戦後、米軍駐留に伴う風紀の乱れから青少年を守るために、町会主導で児童会館を建てた場所であることや、富士塚公園が町会活動の拠点になっていることなど、地域社会に関わる具体的な多面的な情報を得ることができました。

【参与観察】 祭礼の実際を確認するために参与観察も実施しました。富士塚浅間神社では年に一度、11月23日に祭りが執り行われます。次はその祭りへの参与観察で確認できたことを見ていきましょう。

祭礼は五月会の役員の方々によって行われます。当日は朝から役員が境内に集まり、まず落ち葉の掃き掃除を行います。また、鳥居のシメナワに新しいシメを下げ、祭壇に三方を置き、ミカン、柿、リンゴ、サツマイモ、ニンジン、大根、ネギ、タマネギ、バナナ、お神酒などを供えます。

10時ごろから氏子総代の進行で祭儀を執行します。初めに総代が社殿に拝礼し、榊で参列者全員のお祓いを行います（写真3）。そして参列者が玉串を奉奠した後、お神酒を配って、総代の発声で乾杯をします。これらは拝礼、修祓^{※1}、玉串奉奠^{※2}、祝詞奏上^{※3}、直会^{※4}といった神道の式法と大差ないものでした。

富士塚浅間神社は諏訪神社の末社ではありますが、町会関係者が参列し、地元の氏子総代の手によって祭りが執り行われていることが分かります。

この神社については、西立川児童会館玄閣ロビー内に掲示された「富士塚浅間神社の生い立ち」（昭和27年5月内野義蔵氏が記録。昭和63年5月に義蔵氏の依頼で大原太郎氏が筆写）という資料が残されています。以下がその内容の要約になります。

戦前から富士塚の上にご神木が一本立っていたが、昭和二十三年秋の台風で倒れてしまった。古老の話を、明治時代から枯木のまま立っていたが、樹齢はわからないという。諏訪神社の宮司を訪ね、塚の上にお宮を建てたいので、倒れた古木を町会にいただけないかお願いしたところ、あの塚にはもと浅間神社があったので、責任をもって再建してくださいなら喜んで差し上げましょうと快諾された。さっそく町会有志で発起人を立て、建設を進め、昭和二十五年十一月十九日、富士見町西町会の守護神として浅間様を祀り込んだ。神社建設を機に、周辺を公園にする計画も持ち上がり、昭和二十七年に完成した。

上記の内容から、浅間神社の由緒とともに、行事の作法が町内会に伝えられていることが分かりました。五月会の前身である富士見町西町会には「浅間神社例大祭式次第」や「浅間神社祝詞奏上」（祝詞。平成15年12月吉日 大原太郎書 91歳）があり、これを元にした祭りが引き継がれ、執り行われて来たのです。



写真3 富士塚浅間神社祭礼

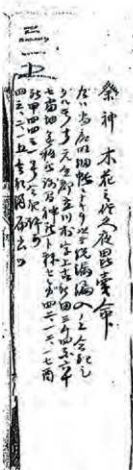


写真4 「神社明細帳」
諏訪神社の項目の付箋
(東京都公文書館蔵)

- ※1 修祓 お祓いをする事
 ※2 玉串奉奠 玉串（榊の葉に紙を付けたもの）を供えること
 ※3 祝詞奏上 祝詞（神様を称える言葉）を読み上げる事
 ※4 直会 神事が終わったあと、お神酒などを頂く酒宴

3. ライブラリーワーク

フィールドワークと同様に重要な位置を占めるのがライブラリーワークです。これは文書や絵図など様々な歴史資料から、対象となる民俗の移り変わりなどを明らかにしようと試みるアプローチ法です。

例えば、昭和20年代まで国や県の神社台帳として利用された「神社明細帳」（東京都公文書館蔵）を見てみると、浅間神社の記載はありません。ですが、諏訪神社の項目の上に貼られた付箋（写真4）に、次のような記載があります。

祭神 木花之佐久夜毘売命

右ハ当該明細帳ニナキヲ以テ脱漏編入ノ上合祀シタルモノナリ、元同郡立川村字上古新田三千四百六十七番地、無格社浅間神社ト称セシガ、四二・一〇・一七西社甲四四三一号合祀許可、四三・二・一五合祀後届出ツ

これによると、明治42年以前、柴崎村上古新田三四六七番地に無格社浅間神社が^{この頃のまじくヤクハのこ}あって、木花之佐久夜毘売命を祭神としていたこと、この神社は「神社明細帳」に記載されていなかったが、それを明治42年（1909）に諏訪神社に合祀したことがわかります（ただし、その後も塚や神木が残っていたことは、これまで見てきたとおりです）。このように、文書記録によって歴史が明らかになるのです。最も古い記録は、寛文7年（1667）「武蔵国多摩郡柴崎村御検地水帳写」に「ふし塚」とあるものでしょうか（保坂芳春著『立川の地名』、1988年）。

絵図や地図といった地理資料も重要な手掛かりになります。享和4年（1804）に描かれた柴崎村絵図（立川市歴史民俗資料館蔵）を見ると、現在の富士塚公園の位置と思われる場所に山型の地形がはっきりと描かれています（立川市史編さん近世部会編『鈴木家文書目録』の口絵参照、2018年刊行）。比較的新しいものでは、昭和5年の「最新実測立川町全図」にも同様の塚状地形を、更には昭和11年の「立川町全図」で地形とともに「富士塚」と

いう名称も確認することができます（立川市史編さん近代部会／立川市史編さん現代部会編『新編立川市史 資料編 地図・絵図』、2019年刊行）。これらの資料から、明治42年以前に浅間神社があったこと、現在の富士塚公園の位置に享和4年時点で富士塚とみられるものが存在していたことが分かります（写真5）。

以上のように民俗の調査は、フィールドワークによる段階的かつ多方面への調査を行い、特定の民俗（ここでは富士塚や浅間神社）の全体像へアプローチしながら、ライブラリーワークによって、その歴史や移り変わりを捉えようとするものです。



写真5 享和4年（1804）柴崎村絵図（歴史民俗資料館蔵）

4. 成果の検討・位置づけへ

最後の段階では、フィールドワークとライブラリーワークで得た資料を、これまでに明らかにされている知見と突き合わせて検討します。

富士山を登拝する信仰習俗は江戸時代中頃から後期にかけて盛んに行われ、各地で富士講と称する組織が作られました。富士塚は、住まいの近隣に、富士山を模して人工的に塚を築き、直接富士山へ赴くことができない人でも登拝できるようにしたものです。

表1 新編武蔵風土記稿の多摩郡内の浅間神社

旧村名	社名	神社概要
高ヶ坂村(町田市)	浅間社	わづかなる社なり 例祭は六月朔日 大蔵院の持
屋敷分村(府中市)	富士浅間社	小社 社地塚の如く平地より築出す 村内の鎮守 例祭九月九日
人見村(府中市)	浅間社	小社 堂山の丘上にあり 例祭六月六日
松木村(八王子市)	浅間社	山上にあり 社あるを以て此辺を富士森と字す
落合村(多摩市)	古塚 富士塚	たかさ九尺
御所水村(八王子市)	浅間社	塚あり 大久保石見守が勧請せしと云 村の鎮守 例祭六月朔日
散田村(八王子市)	富士浅間社	元和年中棟札あり 別当新義真言宗正覚院
原宿(八王子市)	浅間社	
岡(八王子市)	浅間社	高き所にあり 石の小社
小仏宿(青梅市)	浅間社	小社 安永年中野火の為に焼亡
上恩方村(八王子市)	浅間社	案下峠の絶頂 僅の石祠 本山派修験東福院持
戸吹村(八王子市)	富士浅間社	山上にあり 別当浅間坊
油平村(秋川市)	富士浅間社	小社 寛延の棟札 村民の持
平井村(日の出町)	浅間社	山上にあり 日輪寺持
大久野村(日の出町)	浅間社	小祠 棟札に「明応九年中興」毎年六月十五日例祭 神職持
御嶽村(青梅市)	富士浅間社	富士峯と云処にあり 小社 源頼朝建立と云 例祭四月初申
原村(奥多摩町)	浅間社	わづかなる社 村民持
拝島村(昭島市)	浅間社	小祠 近來のもの 富士峯に擬して築ける山 高さ三丈
大澤村(八王子市)	富士浅間社	富士浅間社 小社 山上にあり 曹洞宗龍源寺持
箱根ヶ崎村(瑞穂町)	浅間社	山上にあり
落合村(新宿区)	浅間社	鎮守 例祭三月十五日 村民持
上高井戸宿(杉並区)	浅間社	
榎木戸新田(国分寺市)	浅間社	小祠 源藏持
日野本郷新田(日野市)	富士浅間社	塚あり 小祠 村民持

富士塚というと、このような江戸中期以降に流行したものが有名ですが、富士見町の富士塚はそれ以前からあった富士信仰に基づいているようなのです。

江戸時代の文政年間(1818～1830)にまとめられた地誌『新編武蔵風土記稿』を参照すると、多摩郡においても、24もの多くの浅間神社が認められます。そこに富士見町の浅間神社の記載はありませんが、いずれも山や塚などの小高い地に存在していたこと、中には比較的新しい造立のものがありますが、江戸時代の流行以前から存在していたと考えられる例も少なくないことが分かります(表1)。この点からは、富士信仰を、江戸期に流行した富士講のみ結びつけて理解することが困難であることが窺えます。実際、富士見町の富士塚には、富士講の伝承は伝えられず、記録も発見されていません。このことから考えると、富士見町の富士塚は、富士講が流行する以前から信仰されていた例の1つであると考えられそうです。

それでは、当地における富士山とは、生活上、どのような存在であったのでしょうか? 富士見町の山中、滝ノ上周辺の旧家においては、かつて「富士向き」と称して、富士山に向かって民家が建てられていたという話も耳にします。聞き書きによって、このような生活の中に息づく富士山との関わりが浮かび上がってくるのです。そもそも、富士見町は、富士山が良く見えることで付けられた町名です。富士山を尊ぶ営みや考えが長い歴史を持って、今日に繋がっているのではないのでしょうか。

5. おわりに

以上、富士見町一丁目の富士塚を例に、民俗の調査とその成果の位置づけについてご紹介しました。民俗・地誌部会では、このようにして、地域社会の生活文化を総合的に捉え、「立川市史」へ編さんしていくことを目指しています。民俗・地誌部会の調査は、市民の方々のご協力によって支えられています。今後とも、ご支援を下さいますよう、よろしく願いいたします。

本稿は、民俗・地誌部会の部員である榎木直樹、中野泰によって収集された資料、及び、草稿を元に、囃話藤野哲寛が執筆したものです。

市史編さん事業のあゆみと展望

一事業の中間地点をむかえてー

平成27年度から始まった市史編さん事業も今年度で5年目となり、山登りで例えると、ちょうど5合目にさしかかったところ。事業の後半は資料編の刊行も本格的にはじまり、いよいよ市史編さん事業も佳境に入っています。そこで本特集では、市史編さん事業を振り返り、これまでやってきた主な事業についてご紹介し、また、事業後半へ向けて、今後の展望についても少し触れてみたいと思います。

新編立川市史 完成へのあゆみ

資料の収集・調査

資料がどこに・どれくらいあるか調べます。資料によって寄贈、借用、撮影など、取扱い方は様々です。
また、歴史調査以外の専門的な解析が必要な場合、外部機関に調査委託します。

おもな資料収集先

市内外の資料館、研究機関、公文書館、社寺、個人宅など

資料形態はさまざま

古文書、書類、地図、絵図、写真、伝承土器、石器、石造物など

資料調査

聞き書きや祭り・行事への参加
種実実態分析、胎土分析
文書の解説など

修復

破損している資料の修復・復元を行うと新しい発見を得られる場合があります。

資料選定

市史に掲載すべき、重要な資料かどうか選びます。古文書など文章の解説が必要な資料は、目録化や整理後に改めて選定します。

執筆・編集

時代やテーマごとに文章をまとめます。部会内での執筆を経て事務局内でも編集作業を進めます。

刊行

各資料編に掲載した資料に基づいて、通史やテーマ編を記述します。また、幅広い年代の方々へ読んでいただける「普及版」も刊行します。



R.5

R.4 通史 (上・下)

R.3 近世② 近代① 写真集

R.6 テーマ編 普及版

R.2 先史 現代② 砂川の民俗

R.1 近代②



R.1

古代・中世 現代① 柴崎の民俗

H.31

地図・絵図



調査報告書の作成・広報紙「たちかわ物語」の発行・講演会や展示の開催



地中レーダー調査の様子 (令和元年9月)

地中レーダー (Ground Penetrating Radar : GPR) による探査

この探査は、地中に放射した電波が石などに当たった反応を捉えることで地中の様子を確認するものです。立川市には古墳とはっきりわかる遺跡はありませんが、沢荷荷のあるNo.13遺跡は古墳とされ、現在でも塚が残されています。GPR探査では、実際に発掘をおこなうことなく、塚の中の様子を捉えることができるのが大きな利点です。



修復後の立川文書の一部 (3ページ部会短冊参照)

立川文書の修復

立川氏はいわゆる武蔵七党の西党に属する一族として知られています。立川文書は立川氏によって伝えられた古文書で、西暦1300年代の文書を中心に、原本と写本を合わせて14通が確認されています。立川氏の所領展開のようすがよくわかる貴重な資料であり、市内の紙資料として最も古いもののひとつです。古代・中世部会では、立川文書を詳しく調査するため、修復を行いました。



西和会自治会の神酒所で祭のお話を伺う (令和元年8月)

祭礼調査 (諏訪神社例大祭の調査)

祭礼などの行事について調査をする際、話者の方からお話を伺う聞き書き調査のほかに、調査者が実際に行事に足を運んで観察・記録をすることがあります。これを参与観察と言います (今号の部会特集に調査例があります)。民俗・地誌部会では8月の諏訪神社例大祭、9月の阿豆佐味天神社例祭などを対象に、毎年祭礼調査を行っています。

市史編さんプロフィール

名前 産業文化スポーツ部地域文化課市史編さん担当
住居 立川市錦町3-5-22 YAZAWA DEUX ビル201

立川市の歴史を秘蔵の資料でつづけて
調べまわります。仕事です!!



市史編さん室引越しの記録

市史編さんの事務局は、平成27年4月、歴史民俗資料館の一室を借りて職員2名でスタートしました。同8月には専門嘱託5名が加わり、旧職員会館へ移転しました。旧職員会館は、昭和5年建築の木造住宅（右写真参照）で、資料保存などに耐えられるものではなく、準備室として一時的に使用しました。

平成28年4月には本庁舎内の会議室に移転し、資料の収集なども徐々に開始されました。その後、収蔵資料の増加に伴い、平成29年8月から現在の執務室に移転しました。現在はこの場所で常時8名の職員が執務を行っています。

市史編さん室のご近所さん

市史編さん室の近くには、立川南通りをはさんで子ども未来センターとたましん RISURU ホールがあります。

現在子ども未来センターがある場所は元々市役所があった場所です。現存しているのは昭和45年（1970）に建てられた第2庁舎で、まんがパークや錦連絡所等として今でも活躍しています。

子ども未来センターの東隣、大小ふたつのホールと会議室等があるたましん RISURU ホールは市民会館として昭和49年（1974）に開館しました。市史編さん担当が置かれる地域文化課の事務所もこちらにあります。



旧職員会館▶



市史編さん事務局の様子▶



昭和42年（1967）撮影。歴史民俗資料館蔵

◀写真中央は旧第一庁舎（現在は取り壊され、この裏手に建設された第二庁舎が親子ども未来センター）。昭和49年には写真右下の位置に旧市民会館が建てられました。

公文書の保存書庫

立川市の公文書を保管している書庫はいくつもあります。実は子ども未来センターの中にも書庫があります。旧庁舎時代に文書庫として使われていた部屋の一部が、市役所が移転した現在も文書庫として使われているのです。

ここでは、長期・永年の保存が決まった公文書が多数保管されており、たとえば明治時代からの立川・砂川同議会の記録、まちづくりに関する様々な記録などが保管されています。立川市の近現代史を追いかけられる貴重な資料を保管している施設なのです。



まんがパークが人気が高いです

たちかわ創造舎

先史部会の活動拠点のひとつとして利用しているのが、富士見町六丁目にあるたちかわ創造舎（旧多摩川小学校）の作業スペースです。重くて場所を取る土器や石器などを長期に保管可能で、調査・整理作業に必要な広い作業スペースを確保でき、さらに歴史民俗資料館から近いという条件を満たしているため、この場所が選ばれました。

保管されている土器は修復途中で取り扱いに注意が必要なものもあるため、独立した作業スペースが確保されたこの場所は活動拠点として最適なのです。



今後の展望

平成から令和の時代をむかえ、市史編さん事業も後半戦となりました。前ページでご紹介した市史の刊行に向け、現在各専門部会ではこれらの編集作業に全力で取り組んでいます。また、長期的な視点では、市史編さん事業で収集されたたくさんの資料の保存・活用方法についても検討していかなければなりません。残された時間は長くはありませんが、長期的な課題を見据えつつ、多くの方に利用していただける市史の刊行を目指してまいります。（山下）

多摩の空襲と米軍の攻撃目標

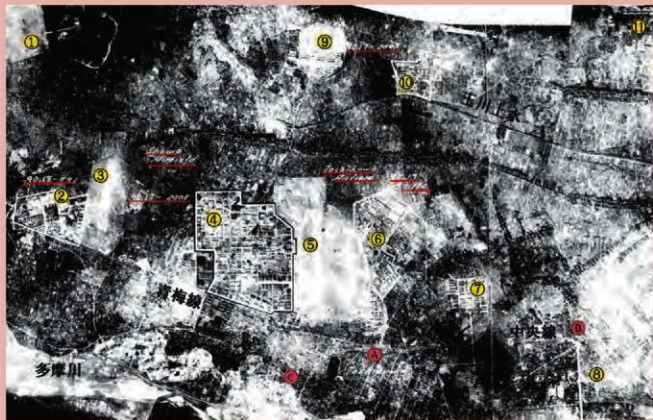
本号を編集している8月15日、令和に元号が改まってから最初の終戦記念日を迎えました。立川市は昭和20年(1945)に少なくとも13回の空襲を受けて多くの方が亡くなりました。昭和20年の立川市の事務報告書には死者約300名とありますが、三多摩の空襲犠牲者を調査記録する会の調査では死者346名となります。

下の写真は立川地域および周辺地域の空襲目標を空撮したもので、米軍戦略爆撃調査団文書の空襲目標情報(地域別及び目標別)に取められています。立川飛行場周辺の軍事施設・軍需工場が把握されていることがうかがえます。米軍は立川市域の陸軍航空工廠や立川飛行機株式会社などに目標番号を付し、空襲を行いました。

昭和20年(1945)4月4日未明の空襲は、立川飛行機を主目標としたB29爆撃機61機による夜間低空の精密爆撃で、被害は立川市・砂川村にとどまらず、多摩地域では8月2日の八王子空襲につく犠牲者を出しました。米軍は攻撃の戦果を僅少としていましたが、目標をそれた爆弾が周辺地域に多数落下し、多摩各地に被害が広がりました。立川飛行機から南西約2kmはなれた立川市の山中坂の防空壕では爆撃を受けて42名が亡くなり、北東約5kmはなれた東村山町所在の東京陸軍少年通信兵学校では本部付近と生徒舎付近に爆撃を受けました。近年の戦争報道でいうところの「誤爆」にあたりますが、事実上の無差別爆撃で尊い命が失われました。

東京陸軍少年通信兵学校では、立川飛行機の関連で空襲を受けたという認識はなく、所有していた大型通信機(大本営通信隊の予備機)が狙われたものと考えていました。また、東村山町では村山貯水池の爆撃を想定して避難訓練や堰堤かさ上げなどの対策をとっていましたが、ともに米軍の空襲目標ではありませんでした。

日米の空襲をめぐる相克は双方の関係資料を分析することで明らかになります。(高野)



▲立川航空工廠・立川飛行機会社・日立航空機立川発動機製作所など米軍の空襲目標写真(1945年3月29日)

TACHIKAWA ARMY AIR ARSENAL (Rikugun koku koshu) (Targets in Tokyo area. Report No. 1-a (4), USSBS Index Section 7. 1945 日本占領関係資料/米軍戦略爆撃調査団文書/目標情報:地域別・目標別 国立国会図書館デジタルコレクション(原資料:米軍国立公文書館所蔵)

写真の数字の「90.17792」などは米軍による目標番号で、①～⑪は③～⑪や河川・鉄道名とともに筆者が便宜上付したものである。

①多摩陸軍飛行場(目標番号2809)、②昭和飛行機(同791)、③昭和飛行場(同1407)、④陸軍航空工廠(同2008)、⑤立川陸軍飛行場(同1404)、⑥立川飛行機(同792)、⑦陸軍獣医資材本廠、⑧陸軍電波兵器練習部国立支部、⑨東京陸軍少年飛行兵学校、⑩日立航空機立川発動機製作所(同2009)、⑪東京陸軍少年通信兵学校 ⑬立川駅、⑭国立駅、⑮山中坂防空壕

*参考文献「この悲しみをくり返さない 立川空襲の記録」(けやき出版)、「多摩の空襲と戦時」(同)、「多摩のあゆみ」119号・141号(たましん地域文化財団)、「陸軍少年通信兵学校」(東村山ふるさと歴史館)、「町の記録が語る戦時の東村山」(同)ほか



平成31年4月～令和元年9月活動報告

月	日	活動内容
4月	4日	民俗・地誌部会・阿豆佐味天神聞き書き調査
	6日	現代部会・特定部会会議
	7日	第1回・近代部会会議
	12日	古代・中世部会・担当者会議
	13日	近世部会・立川院文書調査
	19日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
5月	20日	古代・中世部会・群馬県立歴史博物館調査
	29日	古代・中世部会・光恩寺（群馬県千代田町）調査
	7日	古代・中世部会・常楽院（板橋区）調査
	8日	古代・中世部会・真言宗豊山派総合研究院事相研究所（文京区）調査 阿豆佐味天神社所蔵資料撮影
	12日	古代・中世部会・俊朝寺（港区）調査
	13日	新聞社取材
	17日	現代部会・高松学館関連資料調査 市民協働作業（立川の史料を読む会）
	22日	新聞社取材
	26日	古代・中世部会・敷島神社（埼玉県志木市）調査
	29日	第1回・現代部会会議
31日	現代部会・特定部会会議	

月	日	活動内容
6月	12日	先史部会・国士館大学から大和田遺跡出土土器搬出立会
	21日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
4～6月		普濟寺文書調査（廣福寺）
7月	1日	第1回・民俗・地誌部会会議
	13日	第1回・近世部会会議
	19日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	20日	古代・中世部会・東京中世史研究会共催講座・巡見
	26日	先史部会・個人所有の石蔵調査
8月	1日	第2回・現代部会会議
	3日	現代部会・特定部会会議
	8日	第10回・編集委員会議
	16日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	18日	近世部会・近代部会合同会議 第2回・近代部会会議
	19日	第10回・編さん委員会議
9月	23～25日	民俗・地誌部会・諏訪神社例大祭調査
	予定	先史部会・沢荷古墳地中レーダー探査
	15日	民俗・地誌部会・阿豆佐味天神社例祭調査
	20日	市民協働作業（立川の史料を読む会）
	22日	第2回・近世部会会議



資料・情報提供のお願い

古文書・絵図・地図・写真・地域の年中行事・信仰などの情報をおよせください

市史編さん担当では、現在写真資料を特に集めています。古いものであれば、記念写真や個人的な家族写真からでも当時の服装や生活様式を知ることができ、資料として活用できます。

市史の編さんには、市民のみなさまのご協力が不可欠です。ご提供いただける資料やお聞かせいただけるお話がありましたら、市史編さん担当までご連絡ください。



■文書、書類、印刷物

江戸時代から平成に至るまでのさまざまな古文書・書類・会誌・記念誌、チラシ・広告などの印刷物

■絵図、地図類、写真映像、音声

土地の変遷や街並みの分かる絵図、地図類、景観や生活の様子（お祭りなどの年中行事、七五三、結婚式などの人生儀礼、日々の衣食や住まい）などを写した写真や映像、音声など

■地域の年中行事・信仰、ムラのつきあいや慣習など

「念仏を唱える集まりがあった」といったような、昔から続いている慣習についての情報

■石器や土器など考古資料

市史編さん広報紙 たちかわ物語 vol.8

令和元(2019)年9月20日発行

発行 立川市

〒190-8666 東京都立川市泉町1156-9

編集 産業文化スポーツ地域文化課市史編さん担当

〒190-0022 東京都立川市錦町3-5-22 YAZAWA DEUX ビル 201

TEL (042)506-0021 / FAX (042)525-1601

E-mail chiikibunka-t@city.tachikawa.lg.jp

URL http://www.city.tachikawa.lg.jp/chiikibunka/sisi/hensanshitu/shishi_top.html

印刷 ギョウセイデジタル株式会社

[市史編さん広報紙に関するご意見・ご感想をお待ちしています]



市史編さん広報紙はこちらからアクセスできます。

立川写真館

現代部会編

下の写真は、立川市立第二小学校の昭和30年（1955）ごろの運動会の様子を写したものです。校舎・行事の様子だけでなく、父母らの服装などもわかる貴重な資料です。（栗原政子さん提供）



立川市立第二小学校のある立川駅北側（曙町・高松町）は、大正11年（1922）の陸軍飛行第五大隊の移駐と立川飛行場の開設によって大きく発展した地域です。昭和4年（1929）に開校した二小は、人口増に伴う児童増に対応するため、4年後の昭和8年（1933）に教室の増築をしています。写真の中ほど、校舎の屋根の色が変わっているところから右側がこのとき増築された部分です。その後小学校も増えましたが、戦後の復興とベビーブームで再び各校の教室が不足し、この写真の頃の二小では完成まもない体育館に仕切りを設けて教室として使用していました。

右の航空写真は上の写真と同時期に撮影されたもので、この地域が米軍基地メインゲートの目の前であることがわかります。飛行場が米軍基地となったことで、周辺の地域は様々な影響を受けました。二小に残された資料には米兵との間で起こる問題に関するものもありますが、他方で、クリスマス祭に生徒たちがプレゼントを貰いに米軍基地まで行ったなど交流の記録も残っています。

このほかにも、小学校に残された資料には、市役所に残されたものよりも生活に近い資料が多数含まれています。二小からは戦後まもなくから昭和30年代にかけての資料が歴史民俗資料館に寄贈されており、今年度末刊行予定の『資料編 現代①』でも立川市での生活の様子を示すものとして活用しています。



国土地理院空中写真（1956年3月撮影）を使用

刊行物紹介 新編立川市史刊行物は各種好評発売中です。

頒布場所：立川市役所本庁3階市政情報コーナー、立川市歴史民俗資料館、オリオン書房ノルテ店、ジュンク堂書店立川高島屋店



新編立川市史 資料編

地図・絵図 A4判・フルカラー・約200ページ・DVD付・価格3,000円

調査報告書

先史編1 向郷道跡 竹内勇貴氏寄贈資料調査報告書 A4判・約200ページ・価格1,000円

民俗・地誌編1 砂川青年団資料集 A4判横・約550ページ・価格1,500円

近世編1 鈴木家文書目録 A4判・約250ページ・価格1,000円

令和2年3月刊行予定 新編立川市史 資料編「古代・中世」「現代①」「柴崎の民俗」